

自らの健康に関心を持つ子を育てる学習指導の工夫  
—保健領域「エイズに関する指導を含む」の効果的な指導法について—

目 次

I	テーマ設定の理由	1
II	研究の仮説	1
III	研究の全体構想図	2
IV	研究の内容	3
1	保健学習の基本的な考え方	3
2	学習意欲と保健学習	4
3	学習指導の工夫	5
(1)	指導目標明確化の必要性	5
(2)	指導内容重点化の必要性	5
(3)	問題解決的学習と科学的認識の形成	5
(4)	指導過程の工夫と科学的認識の形成	6
(5)	個に応じた学習指導の工夫	7
(6)	教材、教具を生かした学習指導の工夫	8
4	保健学習における評価の工夫	9
5	エイズに関する指導の工夫	11
6	指導計画作成の基本的な考え方	11
7	保健学習の授業構造論に基づく授業展開	12
8	大単元を通じて問題解決的学習を行う指導過程の計画例	13
(1)	単元計画例	13
(2)	一単位時間における展開例	14
9	6学年年間指導計画	15
V	授業の実践	16
1	大単元名	16
2	大単元の設定理由	16
3	大単元の観点別評価目標と判定規準	16
4	大単元の指導計画	16
5	本時の指導	17
(1)	題材名	17
(2)	題材設定の理由	17
(3)	児童の実態	17
(4)	指導について	17
(5)	本時のねらい	18
(6)	授業仮説	18
(7)	本時の展開	18
(8)	授業を終えて	19
VI	研究の成果と今後の課題	20
◇	主な参考文献	20

宜野湾市立普天間小学校

照 屋 勉

# 自らの健康に関心を持つ子を育てる学習指導の工夫

## —保健領域「エイズに関する指導を含む」の効果的な指導法について—

宜野湾市立普天間小学校 教諭 照屋 勉

### I テーマ設定の理由

今日のような変化の激しい社会では、新たな問題に対処する際、既習の知識・技能だけでは不十分であり、常に新しい知識や技能の習得が要求される。現学習指導要領においても、「社会の変化に主体的に対応できる能力の育成…自ら学ぶ意欲を高めるようにすること」を改訂の基本方針の一つとして示している。また、体育科でも、「…生涯を通じて健康で安全な生活を送るために…自主的に健康な生活を実践できる能力と態度の育成…」(昭和62年教育課程審議会答申・小学校体育科に係る改善の基本方針)と、いずれも生涯を通じた自主的・自発的学習活動の重視がうたわれている。

本校児童の実態を調べてみると、低学年から見受けられる「肥満児」や、高学年女子に多い「近視」、男子に目立つ「むし歯」の問題等が指摘できるが、これらは本校に限らない一般的な傾向ではないだろうか。また、児童の「交通事故の増加傾向」や、全身運動の不足からくる「柔軟性の低下」、食生活の変化等による「成人病の低年齢化傾向」等は最近の問題としていろいろな分野で注目されているところである。児童のこのような実態を考えると、児童一人一人の健康・安全に対する“関心”の低さや“理解”の不十分さが一要因として推測される。併せて、今や世界的問題となっているエイズ教育についても、小学校においては人間尊重の精神を基盤に、児童の発達段階や理解力に応じ生命尊重の精神や男女の望ましい人間関係の確立を目指し、その実施が強く望まれている。

保健学習が、「保健の科学的認識の発達を目指し、思考力や判断力を育て生涯の健康・安全の問題に対処できる能力を育成すること」等々に重点が置かれていることからして、この領域の重要性、学習指導改善等の緊急な取り組みの必要性が認識されなければならない。

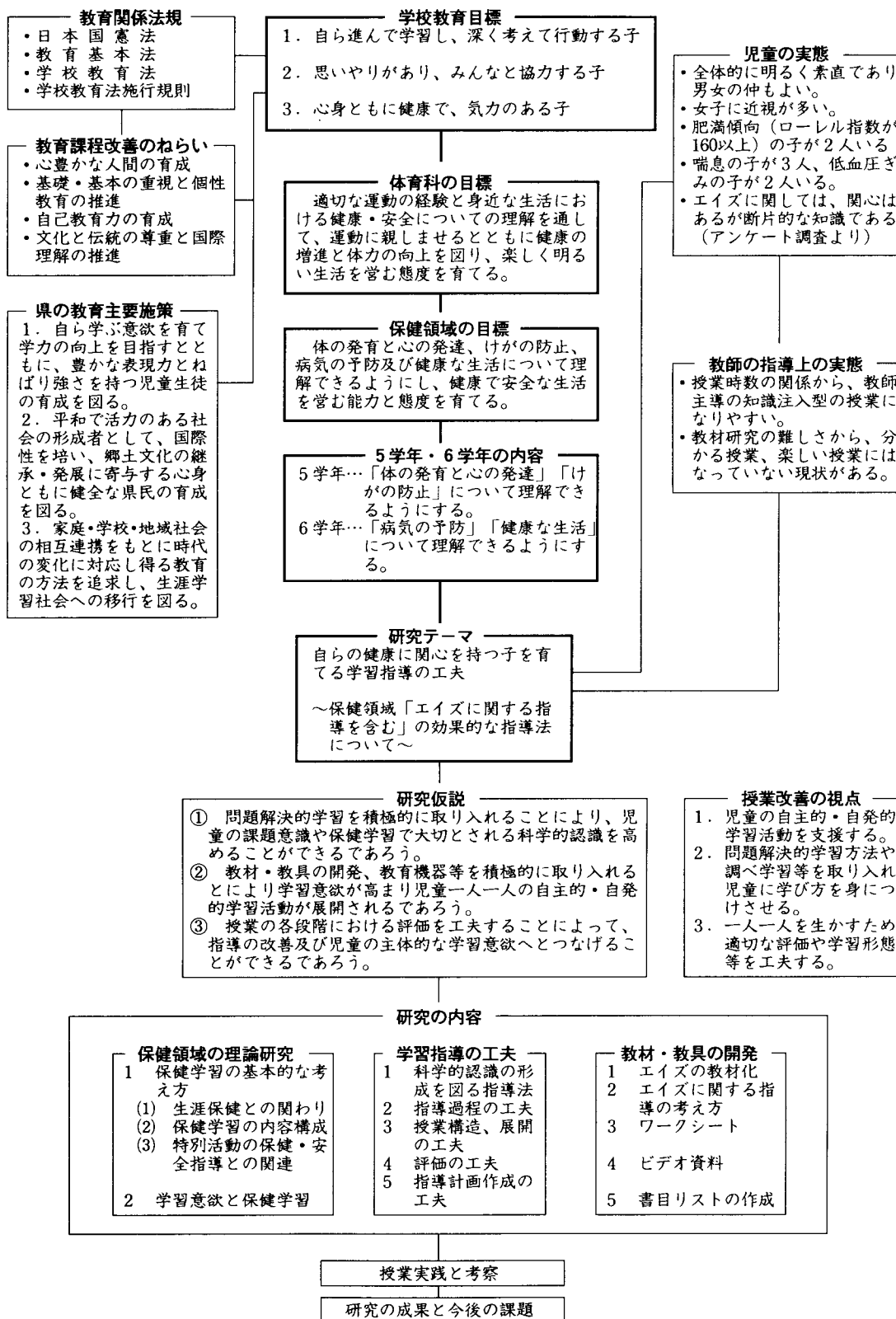
ところで、これまでの実践を振り返ってみると、知識注入に偏った教師主導型による授業展開になりがちで、児童の個人差に十分対応した授業展開を行うまでには至らなかった。そのことは、児童の興味・関心をうまく引き出し意欲的に学習に取り組ませるという面にも支障を来し、結果として、児童の自主的・自発的学習活動を促進することができなかつたと反省させられる。

そこで、“保健学習の効果的な指導法”に焦点をあて、個々の児童が課題意識を持ち、主体的に取り組もうとする意欲を育てる指導法を研究・実践することにより、児童が、現在及び将来に向けて健康に関心を持つようとする姿勢が培われるのではないかと考え、本テーマを設定した。

### II 研究の仮説

- 1 問題解決的学習を積極的に取り入れることにより、児童の課題意識や保健学習で大切とされる科学的認識を高めることができるであろう。
- 2 教材・教具の開発、教育機器等を積極的に取り入れることにより、学習意欲が高まり児童一人一人の自主的・自発的学習活動が展開されるであろう。
- 3 授業の各段階における評価を工夫することによって、指導の改善及び児童の主体的な学習意欲へとつなげることができるであろう。

### III 研究の全体構想図



## IV 研究の内容

### 1 保健学習の基本的な考え方

保健学習は、時代によってその地位や目標も変遷してきたが、ここでは現学習指導要領における保健学習の基本的な考え方について述べてみる。

#### (1) 生涯を通じる健康・安全の重視

急激な社会変化に対処するため、現学習指導要領においては、「生涯学習」、「変化への対応」等の観点が重視されている。保健学習においても、社会の諸変化に伴う疾病構造の変化（伝染病から成人病へ）や、交通事故の増加傾向等への対処から、生涯を通じる健康・安全が重視される。子どもの時期に、健康で安全な生き方を学びとり、生涯を通じて健康で安全な生活を実践できるような能力と態度を身につけさせるという考え方に基づくものである。

#### (2) 基礎・基本の重視

保健学習における基礎的・基本的事項の取り扱いは、「…健康で安全な生活を送るための観点から、健康・安全に関する基礎的・基本的な知識を理解させ…」(小学校指導書体育編)とあるように、その重視がうたわれている。基礎的・基本的事項は、生涯保健という立場からも小・中・高校で一貫した内容になっており、各々の発達段階に応じて取り扱う範囲も異なってくる。小学校では「身近な生活」を通じ、それが押えられる。

#### (3) 保健学習の内容構成と系統性

表1 学習指導要領の内容構成

保健学習の内容構成については、学習指導要領に基づけば表1のようになる。①～③領域では健康成立の三要因（主体、環境、行動）についての認識が整理され、④～⑤領域ではその要素のからまり合いで生じる傷害や疾病についての認識、⑥～⑦領域で労働過程や社会過程における健康保護（保障）のあり方

	領域	小学校	中学校	高等学校
健康の成立と維持	①心身の機能と発達	体の発育と心の発達	心身の機能の発達と心の健康	現代社会と健康ウ、精神の健康
	②健康と環境	健康な生活と環境イ空気…	健康と環境	健康と環境
	③生活と健康	健康な生活と環境ア休養…	健康と生活ア運動と健康	現代社会と健康ア健康の考え方
破綻と防止	④傷害の防止	けがの防止	傷害の防止	現代社会と健康ア交通安全等
	⑤病気の予防	病気の予防	疾病の予防	
健康の保障	⑥職業と健康			生涯を通じる健康イ職業と健康
	⑦集団の健康	健康な生活と環境ウ地域…	健康と生活オ集団の健康等	生涯を通じる健康ア集団の健康

についての認識がまとめられている。つまり、学習指導要領の体系は、健康の成立・破綻・保障の3つの枠組みで構成されていると考えられる。さらに、①～⑤が健康達成の個人的側面(必要条件)、⑥～⑦が社会的努力の側面(十分条件)と捉えれば、健康は両者の統一によって達成されるという考え方も成立する。

系統性については、表1のように小→中→高へと内容が深められ、それが重視される。このようなマクロ的把握は、日々の授業の位置付けを考える上で重要だと思われる。

#### (4) 保健学習と保健指導・安全指導との関連の重視

保健学習は、保健の科学的認識の発達を目指すものであり、現在よりも将来の健康・

安全の問題への対処能力の育成が重視される。一方、特別活動の学級活動等で行われる保健・安全指導は、健康で安全のための生活指導であり、当面の健康・安全の問題に対する習慣や態度といった実践力の育成がねらいとなる。また、保健学習の内容が科学的、系統的であるのに対し、保健・安全指導は日常的（習慣形成）、臨機的であると言える。しかし、「児童の健康で安全な生活のための指導」ということでは対象も目的も同じであるから、両者に強い関連ができるのは当然であろう。保健・安全指導で学んだ事柄を、保健学習で知的に深化、統合し、その結果をさらに保健・安全指導に発展させるという、相互補完的な関係が求められるのである。

## 2 学習意欲と保健学習

学習意欲は、自己教育力を図る上で中核的な要素であり、新学力観においても重要な位置を占めている。これは、児童の生涯保健の実践にもつながる重要な要素だと考える。

学習意欲とは、下山剛氏によると、「種々の動機の中から学習への動機を選択して、学習することを目標とする能動的意志活動」のことで、次の3つの性質①積極性・能動性、②内発性、③価値志向性を含み、心理学の概念に関係づければ動機づけの概念に相当する。また、学習意欲には、状況的意欲（教師の発問による興味の喚起等、一時的な喚起）と特性的意欲（状況に関係しない持続的喚起）の2つの水準があり、両者は一方が高まれば他方も高まるという相互作用の関係にある。

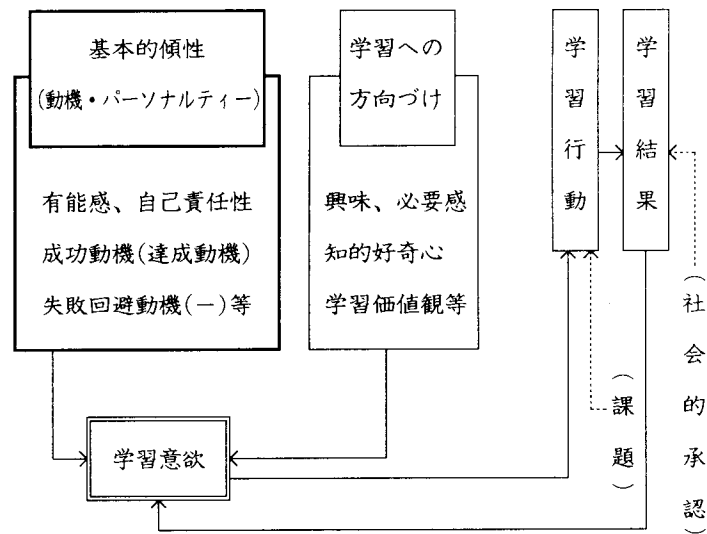
学習意欲を育てるには、学習において、①達成動機や有能感をもたらす成功経験がきわめて重要であること、②自己責任性を育成する上で、児童の自主性・自発性が尊重されること、③失敗回避動機の低減を図る上で、評価やグループ活動の効果的活用が有効であること等を指摘している。

要するに、いかにして学習意欲のプラスの要素を強め、マイナスの要素を低減するかが指導者の課題である。

即ち、児童が、主体的な学習活動の中から自分なりの課題を設定し、グループ内での相互学習（評価）等を通して達成する喜びを多く経験することによって、「もっと学習したい」、「さらに知りたい」といった、内発的学習意欲が育つものとする。

保健学習においても、効果的な学習指導を展開するには、常に学習意欲の理論を踏まえた取り組みが必要と考える。生涯保健への意欲化を図る上からも重要である。

図1 学習意欲の構造



### 3 学習指導の工夫

保健学習の指導については、これまでも、多くの点で指導の困難性が指摘されている。配当時間数が少ないことや、児童の興味・関心の低さ（教科書が無かったことにもよる）、教具の不備等によるものである。児童の生涯保健の基礎を培う保健学習の目標を、限られた時間で適切かつ合理的に達成するためには、現状の問題点を踏まえ、学習指導上いろいろな角度からの工夫がなされなければならない。

#### (1) 指導目標明確化の必要性

保健学習は、健康の保持増進を図るために必要な基礎的・基本的な事項を理解できるようにし、自主的・自発的に健康で安全な生活を実践する能力と態度を育てることを目標としている。これは健康問題に対する科学的対処能力の育成ということであり、将来的には生活の中で実践に結びつくものであることを意味している。従って、授業は、児童の環境や生活の実態から出発し、それを科学の領域に高め、理解したことを生活に帰す（生活から科学、科学から生活）という考え方が基本となる。

指導の明確化についても、これらを踏まえて考えていかなければならない。即ち、児童を的確に把握（興味・関心、健康・安全の実践状況等）し、取り扱う教材の持つ教育的意義を児童の実態と照らし合わせ、現状の児童をどのように変容させたいかを明確にしておくことが重要なのである。

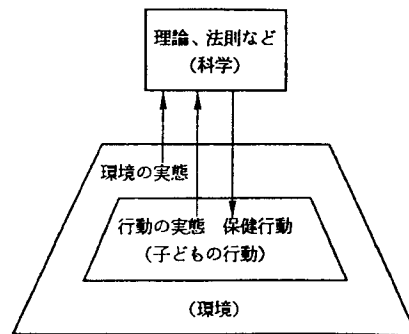
#### (2) 指導内容重点化の必要性

学習活動を通し、保健に関する原理・原則をしっかり理解させるには、内容の精選と同様に指導内容の重点化を図ることが極めて重要である。限られた時間で、いくつもの指導内容を同程度に取り扱えば、かえって十分な理解は図れないのである。児童や地域の実態を踏まえ、内容取り扱いの軽重を考え、時間を十分に使って原理・原則をしっかりつかませる。そのことにより、他の指導内容にも応用が効くと考えられる。

#### (3) 問題解決的学習方法と科学的認識の形成

新学力観のもと興味・関心や意欲、思考力・判断力等が重視され、指導過程においても、自主的・自発的な学習活動に重点が置かれるようになった。保健学習においても、保健に関する科学的認識を形成する観点から、児童の学習活動を中心においた指導方法、指導過程が必要と考える。教師主導による知識注入型の授業では、児童の興味・関心も喚起せず、従って、そこから得られた知識も、生活の中で生きて働く理解には深められないものとする。科学的認識を形成するには、身近な生活の中の健康・安全に関して、児童が興味・関心の中から問題に気づき、自ら課題をつかみ、解決の仮説や見通しを立て、調べる活動や話し合い活動を通す等、科学的に解決していく過程の中から培われていくものとする。問題解決的学習方法が有効と言えよう。

図2 保健学習の授業構造



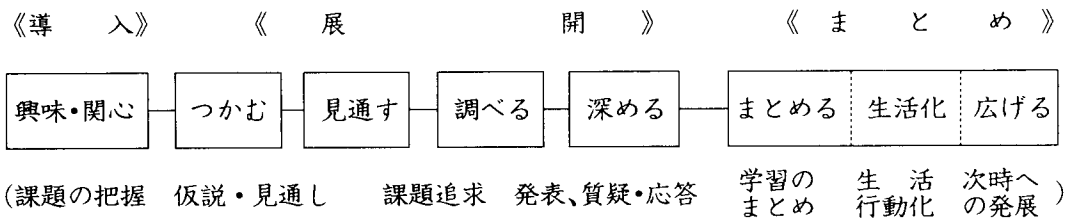
(4) 指導過程の工夫と科学的認識の形成

自主的・自発的な学習を促すには、大単元、一単位時間における指導過程の工夫や一単位時間の各段階における指導過程の工夫について捉えていくことが重要である。

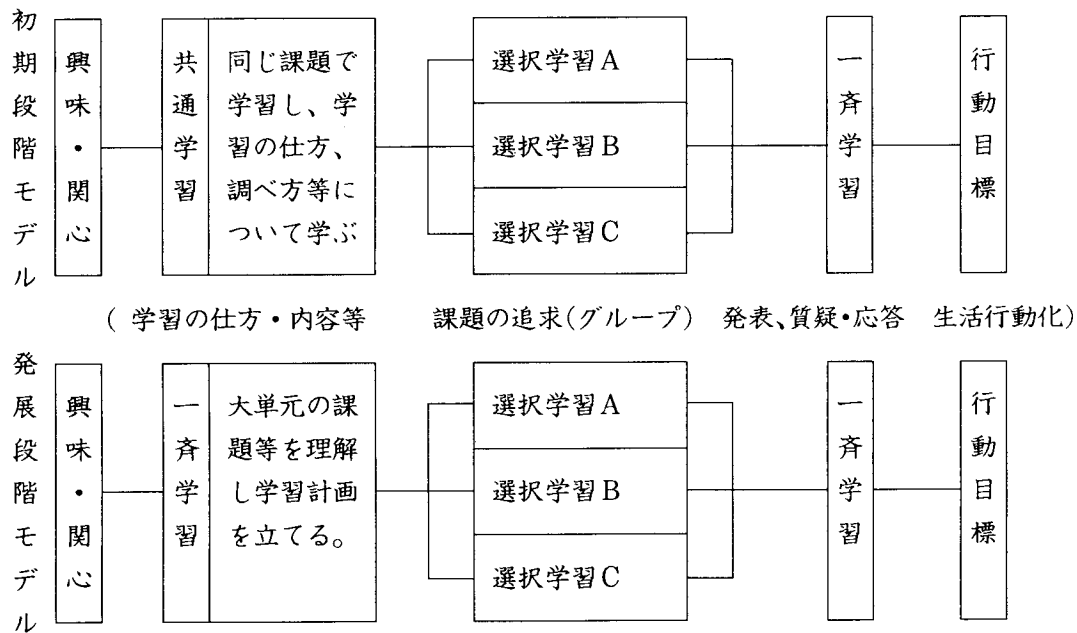
① 大単元及び一単位時間における指導過程（問題解決的学習）

一単位時間及び大単元レベルにおいても、児童の学習活動を中心とした指導過程に変わりはない。どちらも、主体的な課題解決が図られるよう、調べ学習や話し合い活動等に大部分の時間が占められるが、それがスムーズに展開するには、課題をしっかりと把握させることが重要である。また、教師は必要とされる資料を用意する等、児童の自主的・自発的学習活動が促進されるよう積極的に支援していくことが大切である。このような指導過程の中から科学的認識が形成されると考える。

ア 一単位時間ごとに問題解決的学習を行う指導過程例



イ 大単元を通じて問題解決的学習を行う指導過程例



尚、問題解決的学習においては、大単元を通じた指導過程が課題を深く追求することができるが、学習内容や児童の実態等を考慮することが大切である。(P13～14参照)

② 一単位時間ごとに問題解決的学習を行う指導過程の工夫

ア 導入段階

児童の身近な生活の中から、課題に気づかせるような指導が大切である。児童の保健事項に関するアンケート等を、十分に活用したいものである。

イ 展開の段階

見通す段階では、課題解決の予想や見通しについて取り組むことになる。ここでも、児童に自由に考えさせ、教師は、資料の提示や発問等で気づかせるような支援をすることが大切である。

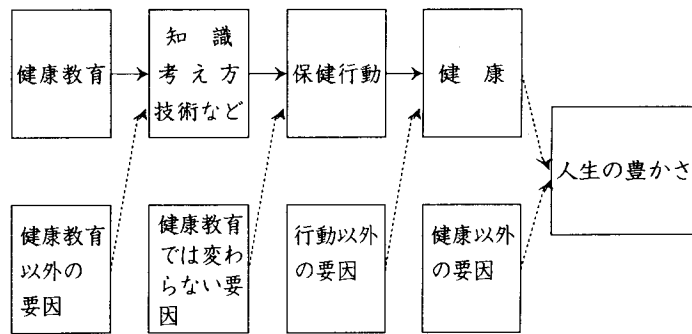
調べる段階では、計画に基づいて、課題解決に必要な資料や知識を集め、それらを検討し一応の解決を図ることになる。教師は、必要とされる資料を用意したり、書目リストを作成しておくなど、情報提供等で支援していくことが大切である。

深める段階では、これまで調べてまとめたことについて発表し、全員の話し合いを通すことにより、学習内容をより深めていくことになる。展開の段階は、科学的認識を形成する上からも非常に大切な段階である。

ウ まどめの段階

この段階で大事な点は、学習したことを必ず生活に結び付けさせるということである。自己の生活の改善という視点で捉えさせ、生活行動化（行動目標）を図るのである。このような過程を通すことにより、学習した知識

図3 健康教育と保健行動に関する一般的な考え方



が真に理解され、実際の生活の中で生きて働くものとなる。

(5) 個に応じた学習指導の工夫

同学年の児童であっても、知識、経験、学習能力や興味・関心・意欲等その一人一人に特性があり、同一の方法で指導するだけでは、一様にその目標を実現することができない。学習を通して、児童一人一人が健康で安全な生活を実践できる能力と態度を育てるためには、個に応じた学習指導の充実が必要である。

① 内容の精選

学習内容の理解に必要・適切な時間を与えれば、多くの児童は学習目標を達成することができる。従って、学習する内容を精選して、児童一人一人が学習する内容を理解するために必要な時間を確保してやること、自己の課題の追求に必要な時間を設定する等、個々の能力に応じた学習が展開できるように配慮することが大切である。達成の喜びや成功感を味わうことにより、学習意欲も育っていくのである。



## ② 学習形態の工夫

教師主導の一斉型・画一型の学習展開だけでは、児童の能力や適性に応じた対応は困難である。従って、学習指導に当たっては、個別学習やグループ学習を取り入れる等、学習形態の工夫が必要となる。具体的には、単元を進める過程において、児童が自分で課題を選んで、自分のペースで学習を進めていく個別学習を行わせたり、グループ学習の中で一人一人が生かされるように工夫したりする等、学習形態を多様に組み合わせることが大切である。失敗回避傾向の強い子でも、グループ学習においては、達成や発表の評価が個人ではなくグループ全体になされるので、伸び伸びと学習活動が展開できるようになる。その中で情緒的結び付きを強め、多少の失敗は克服しやすい心理状態になるなど、学習意欲を育てる点からも、グループ活動等の学習形態の工夫が必要である。

## ③ 児童の興味・関心を生かす指導

興味・関心は、児童の学習活動を支える内面的要因である。個に応じた指導を進めていくためには、児童が興味・関心を持つような指導計画を立て、意欲的に健康に関する問題を追求していけるような教材を準備したり、学習過程の工夫を図ることが大切である。また、児童の興味・関心に応じて自分達が課題を設定して学習を進める方法や、課題は同じでも、追求の方法を変えたり順序を選択して学習を進める方法等を取り入れることも大事なことであろう。

## ④ 一人一人を認める指導

教師は、学習活動を通しての児童の発言や活動について、それを認めたり、励ましたりすることが大切である。このような、教師の受容・承認的態度によって児童は、自信が深まり、精神的に安定し、さらに自己を向上させようとする積極的傾向が生じ、学習意欲を高めていくのである。

## (6) 教材、教具を生かした学習指導の工夫

### ① 教材、教具の児童の活用

教師の指導のもと課題の解決に必要な資料を収集、整理するまでの積極的な調査活動を通し理解を確かなものとするとともに、それをOHP等の教育機器を使って発表するといった、児童主体の学習展開を行うことが期待できる。

### ② 教材、教具の教師の活用

教材、教具を活用することを通して、児童に学習意欲を持たせながら、学習内容を分かりやすく理解させるのに有効である。各段階に応じた活用方法が考えられる。

導入段階では、問題の発見、仮説の設定等に役立つ資料の提示が大切で、単元全体計画の構想を表す資料や、一単位時間における具体的な課題の提示に役立つ資料をスライド等にまとめて活用することができる。展開の段階は、一応の解決を図る段階であるので、仮説の検証に役立つ資料を提示することが大切であり、VTR等の活用が有効であろう。まとめの段階は、理解の定着や、生活化を図る段階であるので、学習した理論をまとめたものや、生活を自己評価できる資料が大切である。

#### 4 保健学習における評価の工夫

評価は、授業を通して、児童がどのように変容したかを学習目標に照らして明らかにし（児童への評価）、それを指導法の改善（教師の活動への評価）の資料とすること、また、児童自身が授業を通して自己評価・相互評価を行い、自己の特性や進歩の状況を知り自覚をもって学習活動に取り組むことができるようにすることを目指すものである。そのため、評価は学習指導の目標と直接結びつき、内容の観点と一致するものでなければならぬ。

表2 単元の観点別評価目標

学習指導要領の改訂に伴い、関心・意欲等に中心を置いた観点別学習状況の評価が重視されているが、単元の目標と観点別評価の関係を「病気の予防」に例をとると、表2のようになる。

観 点	単 元 の ( 観 点 別 評 価 ) 目 標
関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>病気の予防について関心を高め、進んで学習に取り組もうとする。</li> <li>病気の予防に関して学習したことを日常の生活に生かし、望ましい生活習慣や環境づくりをしようとする。</li> </ul>
思考・判断	<ul style="list-style-type: none"> <li>病気を防ぐための条件を、病気の原因との関係で考えることができる。</li> <li>病気が起こる要因を、代表的な病気に即して考えることができる。</li> </ul>
知識・理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>病気は、病原体・環境、生活行動・体の抵抗力が関わって起こることが分かる。</li> </ul>

##### (1) 学習過程における指導と評価の工夫

評価は、機能面の違いから3つに分けられそれぞれの特徴を持っている。形成的評価は、児童の反応のフィードバックを受けながら、児童を評価したり、指導の修正、調節、

表3 評価の機能

改善を行う（指導と評価の一体化）もので学習指導要領においてもその重視がうたわれている。実践では、児童の活動の成果を認め賞賛し、失敗については次

	診断的評価	形成的評価	総括的評価
機能（教師）	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童の知識や興味等を事前に捉え、教育内容、方法を決定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童からのフィードバックを受け、指導の改善に役立てる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習指導の効果を確認。また、今後の指導の決定に役立てる。</li> </ul>
機能（児童）	<ul style="list-style-type: none"> <li>これからの学習の動機づけになる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>つまずきの判断になる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習結果のフィードバック</li> </ul>
実施時間	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習する単元の前</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>指導過程の中</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元終了後</li> </ul>
方 法	<ul style="list-style-type: none"> <li>質問紙法等</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>観察等</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>総括的テスト</li> </ul>
強調される点	<ul style="list-style-type: none"> <li>情緒面、認知能力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>認知能力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>認知能力</li> </ul>

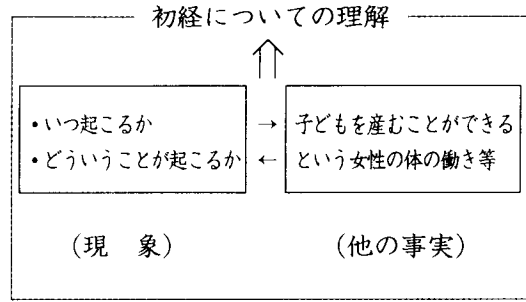
に生かせるように、励ましや支援を行うことが大切である。このような過程を通し、「さらに頑張ろう」「次はできるぞ」というような学習への意欲が喚起されるのである。

診断的評価も、配当時間数の少ない保健学習にとっては有効に活用しなければならない。指導の明確化や内容の重点化を図る上で貴重な資料となる。学習への動機づけの観点からも活用は不可欠である。

(2) 保健学習における評価の方法

① 理解の度合いの評価

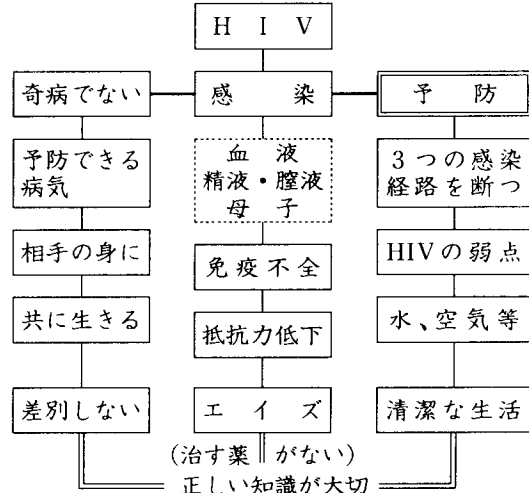
保健学習では、表面的理解ではなく、健康で安全な生活を実践できる能力や態度に結び付けられること、つまり、科学的で行動選択に関わる理解がなされているかが重視される。具体的には、評価する際に、ある概念と他の事実との結び付きに関して理解しているかどうかを評価することが重要となる。



② 概念地図法による科学的認識の評価

概念地図法は、学習者の持つ認知構造を地図の形で外に取り出す方法としてノバックによって開発されたものである。これにより、学習内容・知識が一人一人の児童の認知構造に、どう位置づけられたかをみることができる。図4のように、児童が、キーワードが書かれたラベルをどのようにつなげて地図に表しているかをみれば、認識の仕方をみることができ、どこが理解できていないかを知ることができる。

図4 概念地図法：「エイズ」指導後の認識予想図



保健認識を構造的に把握できるとい  
う点で、児童の評価や授業の評価を同時にみることもでき、実践的な評価と言える。

(3) 自己評価の工夫

児童が学習において、何ができて、何ができていないかを自らが自覚し、意欲をもって自らの学習課題に取り組めるように自己評価の能力を育てることが大切である。また、生涯保健を推進する上からも、自己評価能力が一層強調されるのである。

自己評価の手立てとしては、◇目標や計画を持つことができる場での自己評価を重視すること、◇自分の行動を客観的に評価できるような「規準」を与えること、◇児童の内面が表れるような、自由記述による自己評価も重視すること、◇参考になるような自己評価を発表させ、自己評価の仕方を学べるようにすること等が挙げられる。

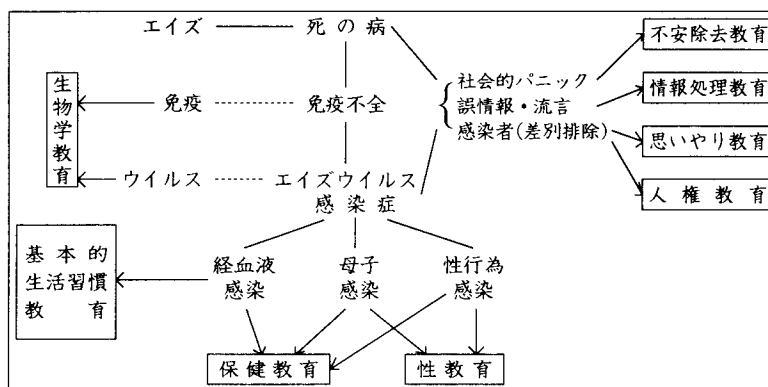
図5 自己評価カード：単元「病気の予防」の例

項目/時間	1時間目	2時間目	3時間目	1時間目(感想)	2時間目(感想)	3時間目(感想)	ABCから選ぼう
進んで学習に取り組みましたか	A B C	A B C	A B C	<頑張った友達>	<頑張った友達>	<頑張った友達>	A 進んで学習、グループをリード B 自分なりに頑張った C 先生に言われて、何となく

## 5 エイズに関する指導の工夫

図6 エイズ教育の構造化

エイズに関する指導については、その性質上さまざまな観点から取り組む必要がある。教科・領域等において取り扱うべき内容を挙げると、人権については社会科、性の指導に関しては主に特別活動、



思いやり・生命の尊重は道徳、科学的な理解と予防については体育(保健)…という具合である。これらの内容は、根底において、「人の生き方」に関わるものであり、従ってエイズに関する指導は教育活動全体を通じて行われなければならない。

### (1) エイズに関する指導の目標

エイズに関する指導の目標は、「感染予防」と「患者・感染者との共生」が2本柱とみることができる。この2つの実現を目指して、適切な行動選択と、望ましい態度変容が求められる。それには、エイズの疾病概念や感染経路等を正しく理解することが大切となる。感染予防においては、「何で感染するか」の知識だけではなく、自分の人生を大切に思う気持ちが不可欠である。患者・感染者との共生は、「何では移らない」即ち、一緒に生活しても感染しないことを理解した上で、人権尊重の精神をもって可能となるものであり、「何で移る」とともに「何では移らない」という知識が必要になる。

### (2) 指導における教師の姿勢

エイズに関する指導については、「人の生き方」に関わる指導であるという自覚を持つとともに、エイズそのものへの治療薬や予防ワクチンがない現状においては「教育が最大の防御」という深い認識を持って臨むことが大切である。

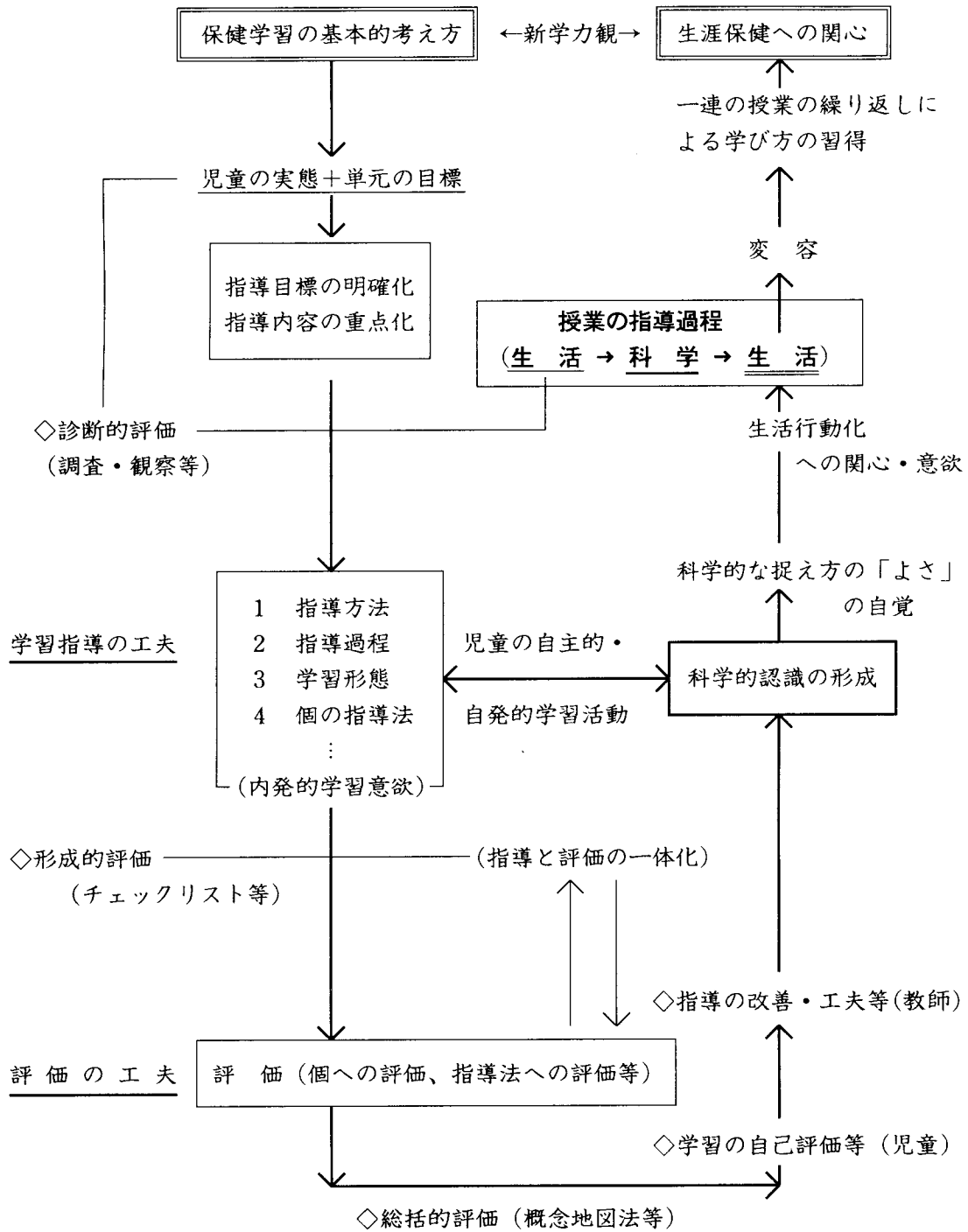
## 6 指導計画作成の基本的な考え方

指導計画には、年間計画、単元計画、単位時間ごとの指導案に至るまで各種のものがああり、これらは保健学習の目標を実現するために、また、系統的な指導を行うために必要不可欠なものである。指導計画の作成に当たっては、保健学習の目標を正しく認識し、次の3つ、①基礎的・基本的事項の理解②思考力・判断力③意志決定力が身に付くように計画することが大切である。また、学習指導要領の総則体育では、学校教育活動全体を通じての指導が示されていることから、指導計画作成の際には他教科・領域との関連を考慮しなければならない。

指導案作成上の留意点は、保健に関する学習理論、それを踏まえた学習指導の工夫事項が計画に生かされるとともに、児童や地域の実態を考慮したものにするということである。

## 7 保健学習の授業構造論に基づく授業展開

保健学習の授業構造論に基づく授業展開の構造を、以下のように考えてみた。保健に関する科学的認識の形成や生涯保健への意欲化を図るために、児童の自主的・自発的学習活動がいかに大切であるか再認識される。



8 大単元を通じて問題解決的学習を行う指導過程の計画例 5 学年…「けがの防止」

(1) 単元計画例

① 大単元について

児童はこれまでに、学級活動等によって、日常生活における交通安全や生活安全の問題を処理する能力や態度を養ってきた。しかし、これらの指導は、習慣的な解決の仕方が中心で、「けがには必ず原因があり予防はそれに基づいて対処できる」と言った原理・原則は科学的には認識されていない。本単元では、安全に関する既習事項を統合し、「安全理論」の習得から児童の行動変容への意欲化へと発展を図るものである。なお、本単元は、中学校の「傷害の防止」の内容に更に発展していくことになる。

② 学習指導の工夫

単元構成の工夫としては、大単元を一つの学習単位とし課題追求にゆとりがもてるようにした。また、中間発表を取り入れ、学習方法の見直しを促す等情報交換の場として活用させたい。指導については、けがの防止における原理・原則の習得に重点を置くことになるが、できるだけ児童の活動の中から学び取らせるように心掛ける。指導過程の工夫としては、個人の興味・関心を重視しアンケート等の活用を図ったり、自分達で課題を選択させるなど主体的に活動させたい。

発表では、簡潔、科学的に説明するための資料活用よさに気づかせる。まとめでは身近な問題に戻し、自己の安全目標の設定など「生活化」を図る。

③ 単元の観点別評価目標（判定規準は略）

関・意・態	◇けがの防止について関心を高め、協力し合いながら進んで学習に取り組もうとする。 ◇学習したことを日常生活に生かそうとする。
思考・判断	◇見通しをもって課題に取り組み、必要な資料を収集してまとめたり発表したりできる。 ◇けがの防ぎ方を、事故の原因との関係で考えることができる。
知識・理解	◇けがの防止には、周囲の危険に早く気づき的確な判断のもとに安全に行動することや環境を安全に整えることが大切であることを理解することができる。

④ 指導計画（全4～5時間：大単元を単位とした問題解決的学習の場合は5時間が妥当）

過程	時	学 習 活 動・内 容	教 師 の 働 き かけ
つ か む	1	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">話し合い→学習計画</div> <p>◇交通事故や、学校などでのけがの恐ろしさについて、写真や経験などをもとに話し合う。 ◇地区内の交通事故や本校でのけがの状況について、掲示資料から読み取り、分かったことや感じたことを発表し合う。 ◇事故を起こしたときの様子を話し合う。 ◇けがの種類や原因などをもとにグループを作り、学習計画を作成する。 ◇調べる方法等を話し合い役割の分担を行う。</p>	<p>○交通事故の実際の写真などを掲示して事故の恐ろしさを視覚に訴え、これからの学習への動機づけをする。 ○全国及び地区内の交通事故による死亡者数の推移表、事故の原因別統計表、本校の事故によるけがの発生状況（場所、時間等）を掲示する。 ○身近な問題であることに気づかせたり、事故には原因があることをつかませる。  ○事故のアンケートをもとに、交通事故や、学校、家庭などの事故に分類させる。</p>
し ら べ る	2 3 4	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">課題追求→グループのまとめ→中間発表</div> <p>◆資料を調べたり、アンケートを分析するなど、グループでの役割に取り組む。 ◇調べたこと等についてグループで話し合う。 ◇グループのテーマについて、原因とけがを防ぐ方法についての一応のまとめをする。 ◆グループで調べたこと、まとめたことを資料等を活用して簡潔に発表する（中間発表） ◇質疑・応答して、学習を深める。 ◇他の発表を聞き、自分達との類似点・相違点等をグループで話し合い、考えを深める。 ◆補充すべき内容等を話し合い各々取り組む。 ◇本発表に向けグループで話し合いまとめる。</p>	<p>○計画で無理がないか内容を把握する。 ○課題の解決で、行動、心の状態などが押えられているか把握する。 ○必要と考えられる資料は、予め準備しておく。 ○机間巡視を行い、補足すべき事項を把握しておく。  ○発表の要点を明確にさせ、資料活用よさについても気づかせる。 ○他グループの課題解決の方法や、まとめ方など、よいところを参考にさせる。  ○課題解決への視点や内容の補充について再考させ、それに従い取り組ませる。</p>
発表・まとめ・生活化を図る	5	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">発表→まとめ→生活化</div> <p>◇グループの発表、質疑・応答等を通し、疑問点等をみんなで話し合い、解決を図る。 ◇本単元の学習内容をまとめる。 ◇「学校でのけがの防ぎ方」について考える等学習成果の生活活用（目標）を考える。</p>	<p>○役割分担して発表させる。  ○質疑・応答させ、学習を深めさせる。 ○学習内容で足りないところは補足する。 ○けがの防止の原理・原則の認識を図る。 ○授業で学んだことを通し、日常の行動を反省させ安全な行動の生活化を図る。</p>

(2) 一単位時間における展開例

① 大単元名…「けがの防止」1/5

② 本時のねらい

ア 関・意・態…けがの防止について関心を持ち、協力し合いながら学習に取り組むことができる。

イ 思考・判断…見通しを持って学習計画を立てることができる。

ウ 理 解…けがには、人の行動、環境などの要因があることを理解することができる。

③ 展開

過程	主な活動と内容	教師の支援・資料	形態	基礎・基本	個の対応	評価
つかむ	<p>交通事故の悲惨さや、学校などでのけがの恐ろしさについて話し合ってみましょう。</p> <p>1 感じたことを発表する。</p> <p>この表は、地区内の交通事故や本校でのけがの状況（件数、場所）です。この資料から読み取ったことや、調べたいこと等を話し合ってみましょう。</p> <p>2 資料の内容を読み取る。</p> <p>けがをしたときの様子について、自分の経験や聞いたことなどももとに話し合ってみましょう</p> <p>3 けがの様子を想起する。</p> <p>学習課題 交通事故や学校でのけがは、何が原因で起こりどのようにしたら防ぐことができるだろうか。</p>	<p>交通事故の写真を掲示する。</p> <p>◇事故の増加傾向 ◇防止の必要性 ◇事故の起こる原因等</p> <p>◇事故の発生には、共通点（要因）があることを気づかせる。</p>	一斉	<p>資料から、内容の傾向がつかめる。（基礎）</p> <p>交通事故、学校での事故も原因が伴うこと。（基本）</p>	<p>児童によっては思い出しにくい事故も考えられるので、アンケート等で把握しておく。</p> <p>課題をつかみきれない児童には、事故の原因別発生の資料等を提示する。</p>	<p>けがの原因や防止に関心を持ち授業に積極的に参加しようとしたか。（関心・意欲・態度）</p> <p>資料の内容を読み取ることができたか。（思考・判断）</p>
調べ	<p>課題の解決に向け、学習グループをつくり、学習計画や学習方法（調べ方等）、役割分担等を話し合ってみましょう。</p> <p>4 けがの種類別（学校・交通事故）等で学習グループをつくる。</p> <p>5 けがの防止に重点を置いて、課題解決に向け学習計画等を話し合う。</p>	<p>児童の興味、関心を重視する。学習計画等についても主体性を重視</p> <p>留意事項 ◇計画に無理がないか。 ◇発生と防止の因果関係が捉えられる内容か。 ◇防止に重点があるか。 ◇資料活用は適切か。</p>	グループ	<p>けがの防止に重点をおくこと。（基本）</p>	<p>見通せないグループにはけがの防止に重点をおいて考えさせる。</p>	<p>友達と協力し合って取り組もうとしていたか。（関心・意欲・態度）</p> <p>見通しを持って学習計画を立てられたか。（思考・判断）</p>
まとめ	<p>6 話したことをまとめる。</p> <p>グループで話し合ったことを発表しましょう。</p> <p>取り組む内容 課題解決の方法等</p> <p>授業の感想や気づいたこと等をまとめましょう</p> <p>7 授業の感想や自己評価等をワークシートにまとめる。</p>	<p>話し合ったことをまとめさせる。</p> <p>情報交換で他グループのよい点を学ばせる。 必要資料を把握する。</p> <p>個々の児童について、意欲面や個別指導の把握材料として役立てる。</p>	グループ 一斉 個別	<p>他グループの発表を、自分達の内容と比較して聞く。（基礎）</p>	<p>ワークシートに補足内容を記入する。</p>	<p>けがは、要因が重なって起こることが分かったか。（知識・理解）</p>

9 6 学年年間指導計画

月	時間	大単元	単 元	指 導 事 項	他教科・道徳	特活等との関連
5 月 }	1	病 気 の 予 防	1. 病気の起 こり方	(1)いろいろな病気 (2)病気になるとき	社会6年 内容(2) 「…国連の働き…」 ・WHO等	S 「自分の健康状 態の理解」 学活 (2)イ (カ)
	2		2. 病原体が もとになって 起こる病 気の予防	(1)インフルエンザの 起こり方 (2)インフルエンザの 予防 (3)結核の起こり方と 予防のしかた	家庭5年B(1) 「栄養素の働き、組み 合わせの必要…」	S 「病気の予防」 うがい、手洗い 指導など 学活 (2)イ (カ)
	3			(4)エイズとは (5)H I V感染経路 (6)H I V感染の予防 について	社会6年内容(2) 「日本国憲法と人権」  道徳…「思いやり、親 切」 「生命尊重」	L 「望ましい人間 関係」 学活 (2)イ (ウ) S 「基本的な生活 習慣の育成」 学活 (2)イ (イ)
	4		3. 生活のか かたがかか わって起 こる病気の 予防	(1)成人病とそれを予 防する生活	道徳…「節制、節度」  家庭6年…「栄養を考 えた食物のとり方…」	S 健康によい食事 のとり方 「学校給食」 学活 (2)イ (キ)
	5			(2)むし歯や歯ぐきの 病気の予防		L 歯ぐきの病気と 予防法 「病気の予防」 学活 (2)イ (カ)
	6		4. 環境がか かわって起 こる病気の 予防	(1)かぜをひくとき (2)かぜの予防	家庭5年A(1)「季節や 気温に応じた被服…」 家庭6年C③ 「…暖房用具の安全…」	S 「身体や衣服の 清潔」 「病気の予防」 学活 (2)イ (カ)
10 月 }	7	健 康 な 生 活	1. 運動・食 事、休養・ 睡眠と健康	(1)運動と健康 (2)食事と健康	家庭5年B「体に必要 な栄養素」 家庭6年B「栄養を考 えた食物のとり方」	S 健康によい食事 のとり方 「学校給食」 学活 (2)イ (キ)
	8			(3)休養と健康 (4)睡眠と健康		
	9		2. 水・空気 日光と健康	(1)水と健康	理科6年…「生物とそ の環境」	
	10			(2)空気と健康 (3)日光と健康	家庭6年C「…住居の 働き…」	S 教室の喚気 「環境の清潔」 「病気の予防」 学活 (2)イ (カ)
11 月	11	3. 学校・家 庭・地域と 健康	◇健康を守るための 学校・家庭・地域 の活動	社会4年…「地域社会 の諸活動」 家庭6年C「家族の仕 事役割」	S 健康な生活の反 省	



# V 授業の実践

体育（保健領域）学習指導案

平成7年2月21日（火）4校時  
6年2組 男子15名 女子18名  
授業者 照屋 勉

## 1 大単元名 「病気の予防」

### 2 大単元の設定理由

本大単元においては、風邪など身近に経験している病気の例をもとに、これまでの「健康や安全に関する」学級活動等の成果や体験的に認識してきた事項を、系統的な知識として深化、統合を図っていくことがねらいとなる。即ち、「病気の発生には要因があり、発生要因に対する適切な対応によって予防できる」のように、病気の予防の原理・原則を理解することが学習の中心であり、このような学習を通すことが、健康な生活をするために必要な力や態度を養うことにつながるのである。

また、今日、世界的な問題となつている「エイズ」については児童の関心も高く、ここでは小単元「病原体がもとになって起こる病気の予防」の発展として位置付け、病原体による病気の予防の原理・原則をしっかりと理解させたい。

### 3 大単元の観点別評価目標と判定規準

観点別評価目標と判定規準（判定規準のB、Cは略）

大単元の観点別評価目標	関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>病気の予防について関心を高め、進んで学習に取り組もうとする。</li> <li>大単元で学習したことを日常の生活に生かし、望ましい生活習慣や環境づくりをしようとする。</li> </ul>
	思考判断	<ul style="list-style-type: none"> <li>病気が起こる要因を、代表的な病気に即して考えることができる。</li> <li>病気を防ぐための条件を、病気の要因との関係で考えることができる。</li> </ul>
	知識理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>病気は、病原体・環境、生活行動・体の抵抗力が関わって起こることが分かる。</li> <li>病原体がもとになって起こる病気の予防には、病原体を体に入れないことや、体の抵抗力を高めることが必要であることが分かる。</li> <li>環境や生活の仕方が関わって起こる病気の予防には、調和のとれた生活とよい環境が必要であることが分かる。</li> </ul>
		<p>具体的評価目標（概略）</p> <p>〈判定規準〉 A：十分満足できる</p>
つかむ	◇病気の予防について関心を持ち、進んで学習に取り組もうとする。（関・意・態）	◇病気の予防に強い関心を示し、自分やグループで調べるテーマ及び方法を考え、積極的にグループをリードして学習計画を立てている。
調べる	◇グループや自分の学習課題について、協力し合い進んで探求しようとする（関・意・態） ◇病気の予防について、要因との因果関係で考えることができる。（思考・判断）	◇進んで情報を収集したり、友達にアドバイスしている。 ◇病気の要因や予防について、その因果関係を科学的に捉えて考えられる。
発表・まとめる	◇分かりやすく発表できるとともに、質問に対しても相手が理解しやすいように答えることができる。（知識・理解） ◇病気の予防に関心を深め、生活に生かそうとする。（関・意・態）	◇発表時の発言や、他のグループの発表への質問にも十分な知識、理解を示した。 ◇学習を通して得た知識や理解から病気の予防についての関心を深め、自分の生活を見直し具体的な改善点を考えながら生活に生かそうという意欲が感じられる。

### 4 指導計画（3／6時間目）

		学 習 活 動 ・ 内 容
つかむ	1	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">話し合い→学習計画</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>◇かかったことのある病気やよく知っている病気を発表し、病気が起こる原因を考える</li> <li>◇病気の起こり方を大きく分けて(病原体・生活行動、体の抵抗力・環境)考える。</li> <li>◇いろいろな病気を主要因との関係で考える。</li> <li>◇それぞれの課題について、調べたいことを決める。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・生活の仕方…むし歯等</li> <li>・環境…風邪等</li> </ul> </li> </ul>

		<b>共通課題（病原体の要因）→学習の仕方</b>
調	2	<p>「インフルエンザ」「結核」等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◇インフルエンザ、結核について選択別のグループに分かれる。</li> <li>◇グループの中で、どのような観点で調べていくか話し合い、各自の課題を決める。</li> <li>◇調べ方や学習計画を話し合う。</li> <li>◇計画にそって、個別・グループで取り組む。</li> <li>◇調べたことを発表し合い、学習のまとめをする。</li> </ul>
べ	③	<p>「エイズ」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◇エイズの何が問題かを考え、課題をつかむ。</li> <li>◇課題の解決に向け、同じテーマの人とグループをつくり、協力して取り組む。</li> <li>◇課題解決に向け、調べ学習を行う。</li> <li>◇調べたことをグループで話し合い、発表に備えまとめる。</li> <li>◇役割分担して、発表する。</li> <li>◇質疑・応答し深め合う。</li> <li>◇学習を生活にどう生かすか考える。</li> </ul>
る	4	<b>課題追求→グループ学習→まとめ</b> 「生活の仕方」「環境」
	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇これまでの学習の仕方を参考に、同じ学習課題を持つ人とグループを編成し、課題の観点等を話し合う。</li> <li>◇グループで取り組むこと、個人で取り組むことを確認したら、計画にそって調べ学習に入る。</li> <li>◇グループで予防法について話し合い、まとめる。</li> <li>◇まとめたことを、発表用に準備する。</li> </ul>
ま	6	<b>発表→まとめ→生活化</b>
と		<ul style="list-style-type: none"> <li>◇各グループで協力しながらまとめたことを発表する。</li> <li>◇全員で質疑・応答しながら学習内容を深めていく。</li> <li>◇今までの学習をもとに、病気の起こり方や予防についてまとめる。</li> <li>◇学習したことをどのように生活に生かしていくか考える。</li> </ul>

## 5 本時の指導

(1) 題材名……「エイズの正体とその予防」

(2) 題材設定の理由

エイズについては、テレビや新聞等の報道により児童はある程度のことは知っている。しかし、児童の知識の幅には相当の開きがあり、知識の内容も断片的なものがほとんどで、まとまりに欠ける。そのようなことが影響していると考えられるが、児童のエイズに対するイメージが「怖い」に象徴されてしまっている。現代の国際化社会の中で、エイズ感染が爆発的に起こっていることに気をつけ、エイズをただ恐がるのではなく、自分達の身近な問題として捉えさせることが重要となる。児童には、エイズについての正しい知識のもとに、感染予防の仕方を理解させ、エイズに対する不安や偏見を取り除いていくことが重要になる。題材の位置付けは、小単元「病原体がもとになって起こる病気の予防」の接触感染の教材として同単元の発展として取り扱い、病原体が要因となる病気の予防についての原理・原則をしっかり理解させたい。

(3) 児童の実態

アンケートよりエイズという言葉は知っているが、どんな病気か理解している子は30%しかいないことが分かった。また、病原体（HIV）を知っている児童は非常に少数で、感染経路を把握している児童も33%と低く、このような状況が影響しているのか、エイズに対するイメージが「怖い」から（47%）に代表されている。感染についての知識の度合いの質問では、「あまり分からない」から「性交渉、母子感染」というものまであり、知識の個人差がかなり大きいことも分かった。エイズに対する関心度については、「エイズについて考えてみたい」が70%あり、関心の高さが伺えるが残り30%「自分に関係ないから等」の児童の関心の低さは問題であり、身近な問題であることに気づかすような指導の手立てが必要である。

(4) 指導について

本時のねらいを達成するためには、上のような児童の実態を踏まえ、学習指導上いくつかの観点で工夫を施さなければならない。以下に観点別で示していく。

- ① 指導目標の明確化………怖い病気ではあるが、正しい知識があれば防げることを理解させる。
- ② 指導内容の重点化………感染ルートに基づいた「予防法」に重点をあてる。
- ③ 指導方法の選択………児童の主体的取り組みを促すため、問題解決的学習方法を取り入れる。
- ④ 指導過程の工夫………調べ学習、話し合い活動を授業の中心にする。
- ⑤ 教育機器等の活用………効果的な発表にするため、教育機器の活用を促す。
- ⑥ 個に応じた指導の強化………興味に応じた課題の選択、ワークシートの活用等。
- ⑦ 指導と評価の充実………アンケート、チェックリスト、概念地図法の活用等。
- ⑧ まとめの生活化の工夫………学んだことを生活で生かすように促す。

- (5) 本時のねらい  
「エイズ」に関心を持って取り組み、病原体や感染の仕方を捉えるとともに、それに基づいた予防法を理解する。
- (6) 授業仮設  
エイズについて身近な問題として捉えさせ、課題解決に向け積極的な調べ学習や話し合い活動を促すことにより、エイズに対する科学的認識を形成することができるであろう。
- (7) 本時の展開

過程	主な学習活動	教師の支援・資料	基礎・基本	個への対応	評価
つかかむ	1. 前時の学習を振り返る。 2. 学習課題を把握する。  これは何についての統計資料でしょうか？ (1) (エイズ) 感染者数の世界的推移 (2) (エイズ) 感染者数の我が国における推移 (3) 病気発症における死亡率  (1)問題(資料)を確認し、何の病気が考える。 (2)今日の学習課題を考える。  エイズ感染は、どのようにしたら防ぐことができるだろうか。	1. フラッシュカードを提示。 2. 問題を提示する。  ◇爆発的数値の伸びに気づかせる。 ◇前時の課題を想起させる。	☆前時の学習から予防が重点だと分かること(基礎)	・分かりやすい資料を、順次提示していく。	・エイズに関心を持ち、意欲的に課題をつかもうとしていたか。(関・意・態)
見通す	3. 課題の解決方法や、学習計画についての見通しを考える。	3. テーマ別で予習したことを、調べ学習でさらに深め、それを皆で話し合っ解決方法を考えていけばよいことに気づかせる。			
調べ	4. 課題の解決に向け、テーマごとにグループを編成し、調べ学習をする。 ①エイズ発生の歴史 ②エイズの正体 ③体を守る働き(免疫) ④HIV感染の仕方 ⑤HIV感染の防ぎ方…等  5. 調べたことをグループで話し合いまとめる。 6. 発表に向け、資料の整理や役割分担を考える。	4. 取り組む内容が適切か等確認しながら、活動を支援していく。 <内容の予想> ①エイズは新しい病気で… ②HIVという病原体… ③体の抵抗力(生得、抗体)… ④血液、性交渉、母子等… ⑤血液感染…入り口と出口…  5. 相手が分かりやすいようにまとめさせる。 6. 発表や質疑・応答等の役割を分担させる。	★感染はHIVによること(基本)  ★エイズとは、免疫力が弱まって、普段罹らない病気に罹ること(基本)	・個々に応じたテーマを確認する。 ・つまづいている児童を励ましたり必要な資料を提示する等、支援する。	・エイズについても前時の学習(予防の3原則)を当てはめて考えることができたか。(思・判)
深め	7. 発表、質疑・応答を活発に行い、課題の解決に向け全員で練り合っていく。 8. 課題について、観点を整理し、一応の解決を図る。	7. 教育機器を有効に活用させる。  8. 課題の解決に際しては、観点を整理していくよさに気づかせる。	★清潔な生活が大切なこと(基本)	・チェックリストの誤りは資料等で気づかす	
まとめる・生活化を図る・広げる	9. 今日の学習をまとめる。  学習の成果を、生活にどのように生かしたいですか。  10. 生活目標を考える。  今までの学習方法を参考に、「生活行動」「環境」の2つの要因に対する予防について、選択し学習計画を立てよう。  11. 課題を自由に選択し、グループに別れ話し合う。	9. 観点別にまとめさせる。  10. 生活に生かすよう考えさせる。  11. 興味あるテーマに取り組めるようグループ編成に留意する。	★病原体からの予防の原則を適用できること(基本)  ☆学習の成果を生活に生かせること(基礎)	・概念地図法で、認識の程度を確認し、一斉及び個別で指導する。	・感染の仕方、それに基づく予防法等について理解できたか。(知・理)  ・学習を生活に生かそうとしたか。(関意態)

- (8) 評価 エイズ感染の仕方や、それに基づいた予防法を理解できたか。

(8) 授業を終えて

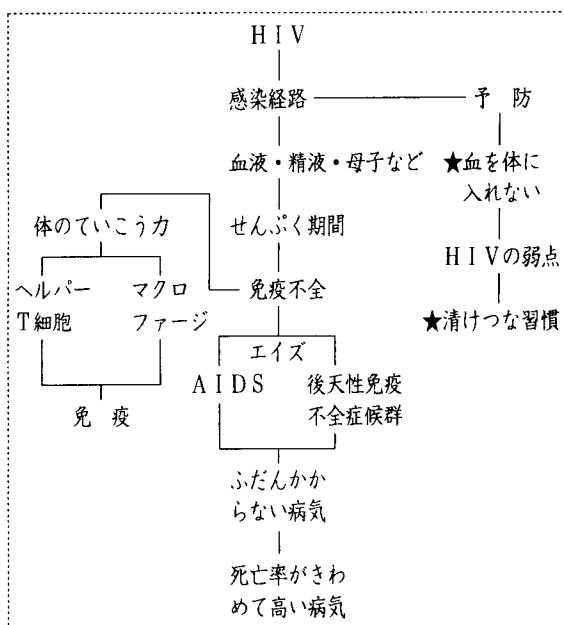
児童の興味・関心の高いエイズを、「病気の予防」の小単元「病原体がもとになって起こる病気の予防」の発展として位置付け、自主的・自発的な学習活動のなか、しっかりと理解が図れるよう考慮しながら授業実践に臨んだ。

〈成果として〉

- ① 課題を効果的に解決するため6つの柱（テーマ）を設定したことにより、児童が課題解決への筋道をしっかりとつかむことができた。
- ② 課題解決へのテーマをグループ及び個人の興味・関心で選択させたので、一人一人が意欲的に学習に取り組むことができた。
- ③ グループを中心とした学習活動のなか、児童同志の協力や教え合い、更に、普段は学習に消極的な児童も活発に活動するなどの場面が多くみられた。
- ④ 発表では、VTRや実物投影機等の教育機器を豊富に活用し視覚に訴えての説明ができたので、児童の学習意欲が高まり活発な質疑・応答が展開され、学習内容が深められた。

(児童の捉えたエイズの構造)

- ⑤ チェックリストによる形成テストを行ったことにより、児童が自分のつまづきを進んで調べようとする等、主体的な学習意欲へとつなげることができた。
- ⑥ 調べ学習では、専門の参考図書やビデオの活用を促したことにより、発表の段階においては、問題に対し科学的に捉えようとする姿勢が伺われるようになった。
- ⑦ まとめで概念地図法（構想図）によるテストを行ったことにより、児童のエイズに対する理解を定着させるのに役立った。



〈今後の課題として〉

- ① 一単位時間としては、学習内容が多すぎたことが挙げられる。形成的評価、総括的評価ではある程度の理解は示したものの、全児童がしっかりと理解するには内容の精選、及び他教科等との連携が必要だと考える。
- ② 上のことと関連するが、エイズに関する指導においては、その重要性を考慮すれば他教科・領域との連携を先ず考えるべきであろう。保健学習と学級活動のバック学習が効率的で有効と考える。学級活動のショートやロングと保健学習を、学級の実態によって時数を調整して組み合わせる方法である。エイズのみならず他の学習内容にも適用できるので、これからの実践に生かしていきたいと思う。

## VI 研究の成果と今後の課題

近年の急激な社会変化や平均寿命の伸び・エイズ問題等を考えると、どうしても「生涯保健」への取り組みを意識せざるを得ない。児童が生涯を通じて自らの健康に関心を持ち科学的な思考・判断のもと望ましい行動を実践できるようにするには、生涯保健の考え方が必要不可欠だからである。今回の研究もこのような視点に立ち、理論・実践研究を行ってきた。研究を通し、不十分ながらも保健学習に対する考え方を明確にできるようになったのは大きな成果だと思う。

具体的には、授業に対する認識の変化が挙げられる。これまでは学習内容の基本概念を理解させることに重点を置いていたが、研修を通し、基本概念の理解とともに生涯保健への対処という観点を重視するようになった。対処の仕方で自分なりに明確化できた点は、

- ・授業では、知識・理解の習得を図るとともに、学び方を学ばせること。
- ・学び方が正しいかどうか、結果を通しての自己評価能力を育成すること。
- ・何を学ぶかの選択能力を育成すること。
- ・学び続けることの「よさ」を生活に活用できるようにすること。…等である。

もう一つの成果は、保健学習のねらいである科学的認識の形成と、生涯保健を意識した授業展開との関わりの整合性について、授業実践で明確にできたということである。この両者に重点をおいた指導案で実践した結果、授業前後のアンケートで、「保健学習は分かりやすい」65%→87%、「将来も自分の健康に関心を持ちたい」74%→92%という児童の変容が表れた。今後も検証を重ねたい。

他には、児童の関心の高いエイズについて教材化できたこと、指導過程で自分なりのスタイルを持つことができたこと等が挙げられる。

課題としては、①研究を通して作り上げた全指導案を実践に生かしていき、そのなかでさらなる学習指導の工夫・改善を図っていくこと。②今回はエイズの教材化を試みたが、今後も学習内容をより深めるような、児童の生活に密着した教材づくりに励むこと等である。

### 〈主な参考文献〉

吉田瑩一郎監修	「小学保健教師用指導書」	光文書院	1992年
下山剛編	「学習意欲の見方・導き方」	教育出版	1992年
三浦勇 他	「新しい学力観に基づく子ども のよさを生かす体育の学習指導」	東洋館出版社	1993年
体育科教育編集部	「体育科教育 8」	大修館書店	1992年
北尾倫彦編集	「小学校6年 観点別学習状況の評価 基準表一単元の評価目標と判定基準」	図書文化社	1994年
文部省	「小学校体育指導資料 指導計画の作成 と学習指導」	東洋館出版社	1992年